

マージナルマン 二題

榎場 雅子

（臨床心理士・精神保健福祉士）

マージナルマンとは、子どもから大人へと移る「発達段階の境界期の若者」を指しています。周りから「もう子どもではないのだから」と言われ、一方では「まだ子どものくせに」といわれて、情緒的には極めて不安定な時期で、日本では古くから疾風怒濤の時期などとも言われています。不安定さは、そのまま行動化しやすく、家庭内暴力、不登校、いじめ、家出、引きこもり、更には非行、自死として現れます。

ドイツの心理学者レヴィンによって提起された「青年期の危機」として警告されています。

親は今まで従順だった子どもの突然の異変を「反乱」と考え、今までの苦労は無駄だったと嘆き、「裏切り」と怒る者もいます。異常な言動を「心の問題」とは考えず、「社会が悪い」と決めつけ、責任を放棄する親もいます。そういう大人の弱さをマージナルマンは訴えているのです。

親が自分自身と向き合うことが、子どもの行動の意味を知るきっかけとなり、危機に対応する、手だてともなります（一部家族機能研究所の研究概要より引用）。

ひるがえって、机上の概念的理念だけでは賄いきれない、実際に現実のこととして、当相談室に寄せられた 2 人のマージナルマンの事例を紹介します。

その 1 恵まれた家庭にあって、有名私立大学の付属高校に通いながら、憂さ晴らし的な初発型非行を起こしてしまった G さん

G さんの家族は、両親と子どもは G さんひとりの核家族。父親は有名私立大学の経済学部を卒業、大手銀行に勤めるエリート。母親は音楽大学出身の元音楽教師で、今は自宅でピアノ教室を開いています。G さんは中学から父親の母校の大学付属校に通い、現在は高等部の 2 年。将来は大学への推薦入学も概ね約束されており、事件が起きるまでは、自他ともに認める恵まれた家庭でした。

事件は G さんが高等部 2 年になって間もない 4 月下旬からゴールデンウィークをはさんで 5 月中旬にかけてのこと。中学時代からの顔見知りだった下級生の 1 人から数回にわたって金品を脅し取っていたことが、被害者の母親の訴えで警察の介入するところとなって発覚しました。G さんの両親の驚きは言うに及ばず、学校も大きなショックを受け、重い課題を背負ってしまいました。

G さんの母親の悲嘆のほどは例えようもなく午後 7 時頃から 9 時過ぎまで延々と続きました。

訴えの内容も滅裂に近く、「今まで何不自由なく育ててきたのに…、私が悪いのでしょうか…」
「お金はお返ししたのですよ、それでも罪になるのですか。学校からは自主退学と言われました」
「息子は私を恨んでいるのでしょうか。それは、おかど違いですよ。どうして私がこんなにも、恥ずかしい思いをしなければならないのですか！」等々、時には怒りを露わに時には嗚咽を漏らし、意見がましい言葉をはさむ余地はなく、ひたすら傾聴に努めました。

母親の訴えが一息ついたところで、父親が電話を代わりました。「実は電話の傍らで妻の訴えの一部始終を聞いてはらはらしていたのですが、止めようがありませんでした。言うだけ言って満足したのか、ようやく受話器を渡してくれました。本当に長いあいだ申し訳ありませんでした。黙って聞いて頂き、ありがとうございます」といかにも恐縮した様子で述べてくれました。

ところが、それは長い相談の幕引きではなく、「父親としての、私の悩みも聞いてください」と第二幕の幕開けとなりました。

妻はあのおり混乱状態で家事もままならず、息子は不貞腐れた様子で、自室に籠っています。まるで「家庭内一家離散」とでも言いたい状態です。しかし、現実の問題として、そんな駄洒落を言っている場合ではなく、崖っぷちに立たされているのです。学校からは、自主退学するようにと言われました。父親として、「他校に転校させることで、お許してください」とお願いして、暗黙の了解は得てありますが、安穩と待っていてはくれません。しかし、当の本人も母親も、このことを真剣に考えられる状態ではありません、と切々と訴えられました。

「お父さんのお気持ちは痛いほど伝わってきました。それ故、厳しいことを言わせてください」と断り、「お父さんとしては息子さんの気持ちを徹底的に思い遣って上げて欲しい。息子さんは、一見して、不貞腐れたように見えるが、その実、とり返しのつかない過ちを犯してしまったことで、自分を責め、寒々とした孤独感を覚えていると思う。こんな自分を、お父さんとお母さんだけは、受け入れてくれるかも知れない。受け入れて欲しい、と震えるような思いがしていると思う。親として、子どもを愛している、許している、受け入れていることを、言葉だけでなく、しっかり形に現して伝えて欲しい。それしかない。親が子どもを疎ましく思ったり、突っぱねたりしたら、子どもは落ちていく他はない」と指示的すぎると思いながらも、はっきりと伝えました。

父親は、「父親として、夫としての行く手が見えてきたようです。ありがとうございます」と明るく言ってくれましたが、その言葉で本当に救われたのは相談員自身ではないかと思いました。

それから約1か月、父親から電話がありました。その声は意外なほど明るいものでした。

私はこの1か月を、「夫として、父親として」を課題にして、「言葉だけでなく、形に現して」をモットーにして、妻に対しては家事を手伝い、スーパーの買い物にも行くように心がけてきました。妻は、母親としての優しさを取りもどしたように、食事にも気を配り献立も子どもの好きなものを選ぶようになりました。子どもは食事を家族と共にするようになりました。あたりまえのことを、あたりまえにできることのすばらしさを思い知らされました。これだけは報告しておきたくて」と明るく話してくれました。受け手として、思わずも「あと一歩ですね」と答えました。

それから僅か1週間後、父親から3回目の電話がありました。前にも増して明るい声でした。先日「あと一歩」と何げなく言われた言葉に励まされて、休日の昼食後のゆっくりとした時間に、極くあたりまえのこととして、「過去のことには触れずに、これからのことを考えよう」と言うと、息子は、「ごめん、ありがとう」と言いました。単語ふたつだけの、ぶっきらぼうなものでしたが、そこに込められた思いの深さは十二分に伝わってきました。

結論的に「二学期から全寮制の学校に転校する」と、家族の一致した意見としてまとまりました。さっそく3人で学校に出向き、この旨を伝えて了承して頂きました。二学期からと言いつつ、5月中旬から7月いっぱいまでの2カ月余登校していないので、出席日数不足のために1年留年になることも予測されますが、それも覚悟の上のことです。

お世辞にも優秀な進学校とは言えませんが、単位が取れないと容赦なく留年させる厳しさもある真面目な学校だと思います。一方、寮のシステムとして、週末の土日に家庭に帰り家族と過ごし、週明けには寮に戻る温かさも配慮されています。生活は一変し、厳しいところはありますが、家族みんなの試練と受け止めています、と言ってくれました。

その2 自己同一性の達成と迷いの葛藤と、親からの離脱ができず、逃避的自殺を 凶ってしまったHさん

Hさんの家族は、両親と子どもはHさんひとりの核家族。父親は代々の旧家の当主。青年期まで身体的慢性疾患を患っていて、過保護に育てられた影響もあり、うぬぼれが強く名誉欲もあり、自治会長、民生委員などを引き受け、それを誇りとしていました。その一方、依存型亭主関白で、家庭のことはすべて妻任せ。しかし子どもには支配的で怖い存在でした。母親は、こんな夫に対して何ひとつ不平を言わず、家事一切を引き受け、貞淑で従順な古典型の専業主婦でした。Hさんは、小学生のころから「おとなしくてまじめ」が定評で、学業成績も上位を保ち、都内の名門私立高の2年に在学していました（家族背景を過去形にしているのは、去年の出来事なるが故です）。

Hさんは、高校2年生に進級した頃から、友人関係に親しさや温かさが実感できず、父親に対し、呑み込まれてしまうような恐怖を覚え（後日、本人の述懐）、体調不良を訴えて、散発的な不登校が見られていました。事は学校が夏休みに入った7月の某日、家庭にあった植物用の殺虫剤を飲んで自殺を凶ってしまいました。いち早く気付いた母親の要請により救急搬送され、胃洗浄が施され、大事には至らなかったものの、個室への入院になりました。部屋に入って少し落ち着いたところへ、遅れてやってきた父親の第一声は、「何をやったんだ！ 親に恥をかかせやがって！」でした。母親に向かっては、「個室なんかに入れやがって！ 室料差額なんか払わないからな！」でした。

このとき母親は「唯々諾々と夫に従っているのは、子どものためにも間違いだった」と気付いた、いえ気付かされた、と言っています。「天の啓示だった」とも言っています。

Hさんの退院後、母親は真剣に「子どものためにも離婚して欲しい」と申し出ましたが、父親は、「夫婦の問題ではない」と一笑に付されてしまいました。しかし母親の決意は固く、家庭裁判所に調停を申し立て離婚が成立、自ら親権者になりました。姓も母と子は母親の生家の姓となって、母子家庭としての新しい生活が始まりました。

それから、まる1年を経た7月末のこと、思いがけずHさんのお母さんから電話がありました。お世話になりながら、ご無沙汰していて申し訳ありませんでした。あれから、息子は公立高校へ転校して、4月には無事に3年に進級することもできました。新聞配達のアルバイトを始めました。そこでは私学では得られなかった、親の保護ばかりには頼ってられない、学費の心配にまでふれ、真剣に話し合う大学生もいて、互いに認めあい、尊敬し合う、温かな関係があると言っています。6月17日に18歳の誕生日を迎えて、選挙権も得て、参議院選挙には清き1票を投じてきました。将来は教員になりたい、と受験勉強に励んでいます。

私も負けじと老人ホームでヘルパーをしながら、介護福祉士の国家資格をめざし勉強しています。それやこれやで、生活は一変してしまいましたが、気持ちの上では、親子して充実した毎日です。こんな報告ができることを、うれしく思います、と結んだ思いの深さ、熾烈なまでの潔さ、真摯な生きざまに胸打たれるばかりです。

改めてGさんとHさんの事例を比べて表記してみました。

事項	G 家	H 家
事例の主題	経済的に豊かで恵まれた家庭で、過干渉傾向の両親に反発して、憂さ晴らし的な初発型非行を犯したGさん	生来、性格的におとなしく真面目。成績もよい。自己同一性の達成と迷いの葛藤と、支配的な父親からの離脱に悩み、自殺を図ったHさん
家族背景	父親は有名私立大学出身で、大手銀行に勤めるエリート。母親は音楽大学卒業の才女。自宅で、ピアノ教室を開いている。Gさんは父親の出身大学の付属高校2年に在学していたが、今回の事件で、全寮制高校に転校予定。	父親は代々続く地域の名家の当主。自治会長や民生委員を務め、これを誇りにしている。母親は貞淑従順な専業主婦だったが、Hさんの事件後、離婚。現在は母子家庭、Hさんは名門私立高校に通っていたが、公立高校に転校。
事件の概要	Gさんが高校2年の4月下旬から5月中旬にかけ、下級生を恐喝、警察が介入するところとなったが、「家庭預り」と判断された。	Hさんは高校2年に進級した頃から、自己同一性と迷いの葛藤、加えて支配的父親からの離脱に悩んで自殺未遂。現在は心身ともに健康。
家族の反応・対応	母親はショックのあまり、混乱状態。父親は母親を宥め、Gさんにも温かく接し、全寮制高校への転校を図った。生活は一変するが、家族に与えられた試練と考えている。	母親は唯々諾々と夫に従っているのは間違いと気づき、Hさん退院後に離婚。母子家庭となり、生活は一変、母親も働き、Hさんもアルバイトをしているが、精神的にはむしろ充実している。
特徴と所見	Gさんの非行問題が表出するまでは、自他共に認める恵まれた家庭だった。Gさんの非行は、家族の中に潜んでいる問題の提起であり、警告だった。父親の存在の面目を示している。	Hさんが訴えていた不定愁訴や散発的な不登校は家族への救い求めるものであり、警告であった。母親の気づきは立派、前向きな離婚だった。

- ◎ 家父長の 家族制度は崩れたが 一家の要はやはり父親
- ◎ 優しくて 怖くて弱く強い母 母はいつでも大きな神話

朝日新聞日曜短歌
NHK短歌

この二首は、どちらも本事例とは全く関係なく、短歌愛好家による投稿歌です。投稿先も投稿時期も選者も違いますが、そこには現代日本の社会問題、家族制度の詠嘆が余すところなく詠われています。更に読み深めると、核家族の中での父親像、母親像が浮き彫りにされています。

「マージナルマンの問題行動の萌芽は、日常生活における活動力動の中で醸成される。それは、マージナルマンの魂の叫びである」というレヴィンの言葉の核心に触れるものでした。

レヴィンは言葉を続けて、「マージナルマンの凶悪犯の場合は、親が養育に無関心だったり、子どもを、拒否することが多い。彼らは親に放り出された痛みを回復できない限り、大人社会を挑発するために、凶悪な犯罪を続けてしまう」と警告しています。

少子化時代の今日、その少ない子どもを健全に社会に送り出すことこそが家族の努めであり、世の大人たちに問いかけられている問題ではないでしょうか。

〈こころの電話相談室〉

心の悩み、心のケア、心の健康に関する電話相談室をご利用下さい。

相談日 毎週木曜日 午前9時～午後9時

相談担当 榎場主任相談員 電話番号 04-7100-8369 個人情報厳正に取り扱います。

〈真の家族関係とは〉 家族とはいったい何であろうか。憩いの場にもなり、苦痛の場にもなる。二人の若者の失敗や自殺未遂の背景には彼らなりの意味があったに違いない。2つの事例は家庭での父性と母性のバランスこそが大切であることを教えています。彼らがこの試練を乗り越え、逞しく成長することを願うばかりです (h)。